『ギニョルズ・バンド』の戦争観とセリーヌのシェラ号経験
The View of War in *Guignol's Band* and Louis-Ferdinand Céline's Experience on the *Chella*

市川　陽南子
ICHIKAWA, Hinako

摘要

Louis-Ferdinand Céline is often regarded as an anti-war writer. Many of his works, such as *Voyage au bout de la nuit* (1932) vividly depict the fears and traumas of war for the protagonist-narrator. However, is war always presented as a subject of fear and trauma in his writings? This study suggests that the view of the war in *Guignol's Band*, the novel that he began writing in 1940, may reflect his experiences as a ship's doctor aboard the *Chella* early this year. This experience gave him positive memories of the military and the war. This paper also shows that the war in this novel is an object of satire and ridicule rather than fear under the influence of this experience. I compare this novel with other works and his letters to friends in which he mentioned the vessel, and with the novel *Londres*, written in 1934, which has a similar setting to *Guignol's Band*. The experience on the *Chella* gave his work a more objective perspective on the war than in his earlier works. In *Guignol's Band*, the protagonist-narrator's fear of war is less than in *Voyage au bout de la nuit* and *Londres*, and a more cynical view of war has been shown. For example, in *Londres*, we see a protagonist-narrator who never wants to go to war again and a nation that wants to send him back to the battlefield. In *Guignol's Band*, on the other hand, the protagonist-narrator volunteers to serve again, but the military doctor (and the state behind him) rejects his request. Céline's service on the Chella has received less attention than his service during World War I or his exile at the end of World War II. However, this experience may have played a significant role in changing the worldview of his work, especially the view of war. Thus, analyzing the impact of this experience on his texts is essential when evaluating Céline's work as war literature.

キーワード：*セリーヌ　フランス文学　反戦主義　第二次世界大戦*
Keywords: Louis-Ferdinand Céline French literature pacifism World War II

１．はじめに

ルイ＝フェルディナン・セリーヌの作品ではしばしば戦争への恐怖が描かれる。例えば彼の代表作『夜の果てへの旅』*Voyage au bout de la nuit* (1932)では第一次世界大戦の戦場の

悲惨さと戦地を離れてもなお続く戦争へのトラウマが描かれる。また現在に至るまで続く論争を引き起こした『死体派』*L'École des cadavres* (1938)など一連の反ユダヤ主義的政治パンフレットの中にも、反戦主義的主張が数多く見受けられる(1)。作者自身の経験が色濃く反映されるセリーヌ作品においては、著作における反戦主義的内容も作者のトラウマに由来すると考えられる(2)。そのためセリーヌ自身も反戦主義的作家だと見なされる(3)。しかしながらセリーヌが描く戦争は、常に恐怖やトラウマの対象でしかないのだろうか。本稿ではセリーヌが1940年初頭に船医として乗船したシェラ号での経験が、1940年より執筆された小説『ギニョルズ・バンド』*Guignol's Band* で示される戦争観に影響を与えた可能性を考える。著作の反戦主義的内容とは対照的に、この仕事について語っている時、セリーヌは戦争や軍隊に対して肯定的な見方を示す。しかしながら、これまでシェラ号が『ギニョルズ・バンド』に与えた影響について論じられる機会はほとんどなかった。この小説は未完のまま執筆が放棄されたという事情に加え、物議を醸した『夜の果てへの旅』のような他の小説作品および反ユダヤ主義的政治パンフレットに隠れたことも相まって、詳細な分析があまり行われてこなかった。一方で作者のシェラ号経験が作品に与えた影響も、1930年代後半における反ユダヤ主義やファシズムへの接近および第二次世界大戦末期から戦後における外国への避難・亡命のようなセンセーショナルな出来事に埋もれ、取り上げられる機会が少なかった。そのため、シェラ号の記憶がこの小説に反映された可能性も見過ごされていたと考えられる。このことを踏まえた上で、次に『ギニョルズ・バンド』の戦争観を共通の舞台・人物設定を持つ作品である『ロンドン』*Londres* と比較する。この作品は1934年に執筆されたが作家の生前には刊行されず、2022年10月に初めて出版された。この出版により『ギニョルズ・バンド』との比較が可能となり、後者における戦争観の特徴や、シェラ号の経験が与えた影響を明らかにすることができる。本稿では『ロンドン』の主人公が戦争のトラウマに苦しむ一方、『ギニョルズ・バンド』では主人公が戦争への恐怖から解放されたより冷静な視点から戦争を捉えていることを示す。セリーヌはシェラ号で戦争や軍への肯定的な感情を得たが、そのことは直後に書き始められた『ギニョルズ・バンド』における戦争観にも影響を与えているのではないだろうか。

２．シェラ号乗船経験と『ギニョルズ・バンド』

2．1．セリーヌのシェラ号乗船経験

セリーヌは1940年1月から、海運会社パケ社と雇用契約を結び、この会社が所有するマルセイユ・カサブランカ間の連絡船シェラ号 (le Chella) に船医として乗船する。まもなくシェラ号はフランス海軍に徴用されたため、セリーヌにも軍籍が付与された。そのため、セリーヌは第一次世界大戦に加え第二次世界大戦にも参加したことになる。シェラ号は1940年1月5日未明、イギリスの駆逐艦キングストン・コーネリアン号と衝突して沈没させた際、損傷を

受けるものの航行を続けた。1 月 23 日にマルセイユに帰港した後、パケ社とセリーヌの契約は 1 月 30 日に終了した。なおセリーヌが去った後シェラ号は同年 5 月に修理が完了し再び進水したが、6 月にドイツ軍の攻撃を受けて沈没した。

セリーヌにとってシェラ号での一連の経験は楽しいものだったようだ。友人のクレモン・カミュ博士に宛てた 1940 年 1 月 9 日の手紙で、セリーヌは自身が遭遇した衝突事故について「ここだけの話、あんなに楽しかったことはないよ」« De toi à moi, jamais je ne suis tant amusé(4) »と書いた。またフレデリック・ヴィトゥーは、シェラ号での経験はセリーヌにとって古くからの夢の実現だと述べる(5)。セリーヌは事故を含めたシェラ号での体験全般、この期間中の仕事や生活を気に入っていた。だがマルセイユ帰港後、彼とパケ社との契約は打ち切られた。この契約終了についてヴィトゥーは、セリーヌは契約延長を望んだものの、彼のための他の仕事がなかったためにパケ社が契約に終止符を打ったと述べる(6)。一方でアンリ・ゴダールは、セリーヌの方もこの契約を更新しようとはしなかったようだと指摘する(7)。またゴダールは「僕はこの謹厳で忠実な規律に満ちた環境を気に入ってるんだ。でも母と娘を養うには、給料があまりに低すぎる！」« J'aime ce milieu de sérieux et loyale discipline. Hélas, avec ma mère et ma fille, la solde est infime ! »と、友人宛の手紙を引用し、セリーヌがこの仕事の続行を断念せざるを得なかったのは十分な給与を得られなかったからだとも述べる(8)。別の友人ジャン・ボンヴィリエに宛てた 1940 年 2 月 24 日の手紙では、セリーヌがマルセイユへの帰還時に今後の雇用について不安を抱いていたことが述べられる。

> マルセイユに到着すると永遠の疑問が浮かんだ。「僕はクビになったのか？」いや、そうではないようだ。なぜなら、僕は義務を果たしたし、義務以上のこともやった。海上日誌にもそう書いてある…でも修理に長いことかかったら…ヒロイズムは忘れられるんだ…
> Et puis à l'arrivée l'éternelle question : *suis-je viré ?* non ! Il semble… la raison — que “j’ai fait mon devoir et plus que mon devoir” dit le rapport de mer — mais si on répare trop longuement… on oublie l’héroïsme…(9)

このようにセリーヌはシェラ号での勤務に非常に満足していたものの、経済的理由により仕事を続けることを断念した。

セリーヌ作品の中で、シェラ号経験について言及されている箇所はそれほど多くない。まずパリ空襲の一夜を描いた 1954 年の『ノルマンス：またの日の夢物語 II』*Féerie pour une autre fois II*［*Normance*］で、シェラ号の事故は「建物の崩壊ということなら、僕は沈没に出くわしたことがある。船倉がミシミシと音を立て、全てが解体し、骨組みがバラバラになった…」« À propos des craquements d’immeubles, j'ai passé par des naufrages, j'ai entendu des craquements de soutes, quand tout déboulonne, quand les

membrures cèdent…[10] » と、現在直面する空襲の比較対象として述べられる。また 1960 年の『北』*Nord* では、「『モルヒネ中毒者どもは注射器を煮沸したことなんてないよ…でも化膿したことはほとんどないじゃないか…』異論はない！私は自分もシェラ号の船医として、一晩で 200 本以上の注射をした経験を彼に語った…」« “Les morphinomanes ne font jamais bouillir leurs seringues… et pourtant ne font presque jamais d'abcès…” Nous sommes bien d’accord! Je lui raconte que moi-même médecin du “ Chella ” j’ai dû faire une nuit plus de deux cents piqûres…[11] » と、シェラ号の事故が悲惨で不衛生な医療現場経験として引き合いに出される。ダヴィッド・ラブルーは『北』でのシェラ号への回想を、セリーヌ作品における無力な医師の例として挙げる[12]。しかしこれら 2 作品におけるシェラ号への言及は、あくまで小説内で直面する出来事を描写するための補助的役割のみを果たす。

一方、1955 年に書かれた『Y 教授との対話』*Entretiens avec le Professeur Y* ではより詳細にシェラ号経験が語られる。この架空のインタビューにおいて、セリーヌはキングストン・コーネリアン号との衝突事故を自身の誇るべき経歴の一つとして言及する。

> 「ああそうですか」は結構だ！僕はシェラ号の船医だったんだ！シェラ号は素晴らしい部隊だったんだよ、大佐さん！前から後ろまですっかり武装して！僕たちはこの厚かましい駆逐艦を木っ端みじんにしたんだ！擲弾がみんな爆発した！僕たちを 16 メートルも引き裂いた…船体を 16 メートルも！でも駆逐艦の方は水に空いた穴みたいに、いやまったく！積荷も人も！みんな沈んだ！いつだってトラファルガーってわけにはいかない…海軍の軍法会議にかけようったって無駄さ！手遅れだ！遅すぎる！僕らは 22 ノットの速さで駆け抜けたのさ、大佐さんよぉ！
>
> Y a pas d’“ eh bien! ” ! médecin maritime du Chella ! splendide unité, colonel, le Chella !… tout armé, proue en poupe ! Nous le découpâmes par le milieu cet effronté ! Toutes ses grenades firent explosion !… il nous déchira sur seize mètres !… seize mètres de coque de longueur ! …mais lui, comme trou dans l'eau, pardon ! corps et biens! corps et biens !… c’est pas Trafalgar tous les jours… ils ont eu beau nous faire passer en Conseil de Guerre maritime !… trop tard! trop tard! Nous filions nos vingt et deux nœuds, colonel ! [13]

キングストン・コーネリアン号との衝突事故はあくまで偶発的であり、戦争における戦闘行為とは言い難い。加えて第二次世界大戦でフランスとイギリスは同盟国である。しかしここでセリーヌは、1805 年にフランス軍がホレーショ・ネルソン率いるイギリス軍に敗北した、ナポ

レオン戦争の一環であるトラファルガーの海戦を引き合いに出し、イギリス（軍）への対抗意識をあらわにしつつフランスの軍籍を持つシェラ号の軍事的功績を語る。ここでセリーヌが自分の経験を軍事的栄光と結びつけているのは、『夜の果てへの旅』など多くのセリーヌ作品が愛国心の拒絶や反戦思想を訴えていることを踏まえるといささか奇妙に感じられる。もっとも、『Y 教授への対話』という作品の性質を考えれば、この言葉を額面通り受け取ってセリーヌが戦争を肯定していると断定することはできない。ミシェル・ラクロワは『Y 教授との対話』で架空のインタビューという舞台設定がなされたのは「作家のメディア化」に内在する自己演出への批判のためであり、その上でセリーヌは皮肉と風刺に満ちた「暴力的ピエロ」としての自身の姿を捏造したと指摘する(14)。そのため『Y 教授との対話』の記述をそのまま信じ、セリーヌは一連のシェラ号経験を自らの軍事的功績としてとらえ、軍隊や戦争を肯定的に考えていたとみなすのは早計であろう。

しかしながら、シェラ号乗船時および直後に友人たちへ宛てた手紙からは、当初からセリーヌがシェラ号での経験を軍事的功績と結びつけていることがうかがえる。例えばカミュ博士宛ての手紙で、セリーヌは軍籍を得たシェラ号での勤務について以下のように書いた。

> 君は僕が軍人だということを知ってるから、僕が（委託されて）海軍の（一等）軍医になり、武装した大型船に乗り込んでいることを知っても驚かないだろう。艦長があらゆる点で僕の仕事に満足していることは言うまでもない。勇気と規律、そして常に先陣を切れ。Militaire comme tu me connais, tu ne seras pas surpris de me savoir devenu (par commission) médecin de la marine de guerre (1er classe) et embarqué à bord d'un paquebot armé. Superflu de te dire non plus que le commandant est en tout point satisfait de mes services. Vaillance et discipline, et toujours le premier(15).

またセリーヌはこの手紙に「僕の勇気と規律正しさを鑑みて、波乱に富んだ楽しい生活ができるようないい仕事が見つかればいいと思っている」« J'espère que vu ma vaillance et ma discipline on me découvrira une autre nouvelle planque où je finirai bien par gagner la timbale des bonnes vies bien mouvementées(16) » とも書いており、セリーヌは軍隊的な価値観である「勇気と規律正しさ」« vaillance et discipline »を自らの仕事ぶりと結びつける。このように、セリーヌにとってシェラ号での勤務は軍隊や戦争に対する肯定的とも言える記憶をもたらした。

2．2.『ギニョルズ・バンド』とシェラ号経験

『ギニョルズ・バンド』はセリーヌが 1940 年秋から執筆を開始した連作である。しかし第

二次世界大戦の激化と終戦によって流転の日々を送るうちにセリーヌはこの作品の執筆を放棄した。そのため現在は『ギニョルズ・バンド I』『ギニョルズ・バンド II』の二巻のみが出版され、三巻以降は筋書きや本文断片の草稿のみが現存している。この小説は負傷のため第一次世界大戦の戦場を離れた主人公フェルディナンが、イギリス・ロンドンで様々な出来事に巻き込まれるさまを描いており、1915 年の作者自身のロンドン滞在経験を下敷きにして執筆された。ただし木下樹親は、この小説にはロンドンの記憶に加え、第二次世界大戦時のフランスの潰走やドイツ軍のパリ侵攻のイメージが反映されていることを指摘する(17)。他のセリーヌ作品同様『ギニョルズ・バンド』にはセリーヌ自身の経験が反映されているが、その経験の中に、執筆開始 (1940 年秋) の半年前の出来事である、1940 年 1 月のシェラ号での体験も含まれるという可能性がないだろうか。

この作品でシェラ号経験を想起させる箇所として、まず『ギニョルズ・バンド II』におけるコング・ハムスン号を巡るエピソードを挙げることができる。少女ヴィルジニーの妊娠をめぐりロンドンを脱出する必要性を感じた主人公フェルディナンは、知人プロスペルから紹介を受け、南米へ向かうコング・ハムスン号のコックの職を得る。しかし乗船時間を待つため入ったプロスペルの店で知人たちから妨害を受け、フェルディナンは乗船を断念しロンドンにとどまることを決意する。コング・ハムスン号を初めて目にしたフェルディナンは「ロープが、ケーブルが船を縛っている… (略) でもしまいにはロープを振り払って風を捉える、すっかり穏やかに去ってゆく…奇跡としか言いようがない！」« C'est les filins, c'est les câbles qui le ligotent, […] On largue qu'au dernier instant, il prend le vent, s'en va tout doux… C'est pas autre chose les miracles !(18) »と船が出航する様子への感嘆を交えながら語り、「生まれつき、船のそばにいる時だけ僕は幸せなんだ」 « Ah! je suis heureux que près des bateaux, c'est ma nature(19) » と船や航海への愛をさらに強調する。セリーヌ自身もシェラ号経験について記したカミュ博士宛ての手紙で、「幸いなことに僕には海が残っていて、そんなに変わっていない」« Heureusement il me reste la mer qui n'a pas tant changé(20) »と書いている。アンリ・ゴダールは、パケ社との契約終了後にセリーヌが手紙の中で「航海とその思いがけなさ」« la navigation et ses imprévus(21) »が懐かしいと書いていたことを指摘する。セリーヌは実体験を元に創作活動を行った作家ではあるものの、小説では実際の経験をしばしば大きく変容させる。『ギニョルズ・バンド』も 1915 年の作者自身のロンドン滞在をもとにして執筆されたが、作中で描かれる殺人や少女の妊娠など個々の出来事自体は創作されたエピソードである。そのため、経緯に差異はあるものの、コング・ハムスン号での職を諦めた主人公フェルディナンの姿には、シェラ号の仕事に満足していたにもかかわらず経済的理由からやむなくパケ社との契約を終了せざるを得なかったセリーヌの経験の反映を見てとることができるだろう。

次に、『ギニョルズ・バンド』で描かれる戦争を巡る描写にはシェラ号経験やそこで得た感

情が反映されていることを、シェラ号以前に執筆された作品、特に共通の舞台・人物設定を持つ『ロンドン』との比較を通して検討する。

3.『ギニョルズ・バンド』における戦争観の変化

3．1．シェラ号経験以前のセリーヌ作品における戦争観―『夜の果てへの旅』『ロンドン』

『ギニョルズ・バンド』の戦争観を検討する前に、第二次世界大戦以前のセリーヌ作品における戦争観を確認しておこう。戦線を離れてからも続く戦争へのトラウマが鮮明に描かれた作品として、1932 年の『夜の果てへの旅』を挙げることができる。この小説の主人公バルダミュは負傷のため一時除隊しパリに戻ってきた。しかし彼は散歩の途中に縁日の射的場で銃弾が飛び交う戦場の記憶を甦らせてしまう。帰りに当時の恋人ローラとレストランで夕食を取るうち、バルダミュは「僕らの周りに並んで座っている人々がみんな、食事を平らげる間に銃弾が襲いかかるのを待っているかのように僕には感じられた」« Tous ces gens assis en rangs autour de nous me donnaient l'impression d'attendre eux aussi que des balles les assaillent de partout pendant qu'ils bouffaient(22) »と、戦場と直接的に関係するものは何もないレストランの中で銃弾が飛び交う戦場を思い出す。戦争の恐怖に捕らえられた彼は「みんな逃げろ！と僕は彼らに警告した。野営地なんて放り出せ！逃げろ！殺されるぞ！お前らは殺されるんだ！僕らみんな殺されちまう！」« Allez-vous-en tous ! que je les ai prévenus. Foutez le camp ! on va tirer ! Vous tuer ! Nous tuer tous !(23) » と叫ぶ。発狂したとみなされたバルダミュは病院に収容される。このエピソードには主人公が戦場に対して抱える深刻なトラウマが認められる。

また『ギニョルズ・バンド』同様イギリス・ロンドンを舞台とし、類似する登場人物やエピソードを持つ小説『ロンドン』でも、主人公が抱える戦争に対する根強い恐怖が明示される。『ロンドン』はセリーヌが 1934 年に執筆したが生前は刊行されず、2022 年 10 月に初めて出版された小説である。『ロンドン』の終盤では、フェルディナンの仲間であるボロクロム、ユーゲンビッツ、ロドリゲスが一旗揚げるためにパリへ行くことを計画する。だがフランス人のフェルディナンは、もしフランスに戻れば再び戦場へ送り返されるのではないかと恐れる。「戦争にぶち当たることになるんだぞ、と僕は付け加えた。こことは違う、本当の戦争さ。お前らだってひどいほど違うってじきに分かるはずさ…あそこでは全てが残忍なんだ。お前らの 1912 年の顔なんか、着くやいなや興味の的だぜ」« C'est la guerre en face, que j'ai ajouté. C'est la vraie guerre, c'est pas comme ici. Vous allez trouver une garce différence… Tout du sadique là-bas. Avec vos bouilles 1912, on va vous trouver curieux dès l'arrivée(24) »と、全ての国から追い出されたテロリスト（ボロクロム）や世界中を巡った医師（ユーゲンビッツ）のように経験豊富な彼らでも、戦争の前では時代遅れな存在として目立

ってしまうとフェルディナンは警告する[25]。ここで彼が説く戦争への恐怖は極めて真摯なものである。それには気も留めず、仲間たちはパリ行きの計画を進める。就寝時、フェルディナンは「結局のところ、もし捕虜収容所の鉄条網に連れ戻されるくらいなら自分の頭をふっ飛ばして死のうと僕は決心していた。だが決してそのことは言わなかった。奴らは 3 人とも寝入っていた。猫がずっとニャーニャー鳴いていた」« Dans le fond je me faisais la résolution pour me faire sauter à moi-même la pipe si fallait encore qu'on me ramène aux barbelés. J'ai rien dit de ça. Ils dormaient tous les trois. Le chat miaulait sans arrêt[26] » と、再び従軍するくらいなら自殺しようとまで思い詰める。結局フェルディナンは一人ロンドンに留まることになり、彼が出発する仲間たちを見送る場面で物語は終わる。このように、セリーヌがシェラ号経験以前に執筆した『夜の果てへの旅』および『ロンドン』では、第一次世界大戦の戦場から戻った主人公が持つ戦争への強い恐怖が認められる。

3．2.『ギニョルズ・バンド』の戦争観

『ギニョルズ・バンド』にも『ロンドン』同様、反戦主義や戦場の記憶へのトラウマは認められる。例えば『ギニョルズ・バンド I』でフェルディナンの回想の中に現れる戦友ラウル・ファルシは、軍隊に対する反抗を口にしたため軍規違反で銃殺された。ラウルは逮捕された時、あるいは処刑の瞬間も「くたばれポリ公！」« Mort aux vaches ![27] » と叫び続ける。杉浦順子はラウルが繰り返すこの言葉が、19 世紀末のアナキストたちが警察など制服を着た権威一般について投げつけた反抗的スローガンであることを指摘する[28]。彼らと同様にラウルもまた軍隊や戦争への反抗を表現するため、同じ表現を繰り返した。そのような彼についてフェルディナンは「僕はかたぎの生まれで、両親は勤勉で従順、善良でとっても親切な労働者だった…ラウルはそんな僕を良く教育し、瞳を開いてくれた」« Moi qu'étais petit cave de naissance, fils de mes parents, employés laborieux, soumis, gentils, bien serviables… il m'avait bien fait l'instruction, ouvert les pupilles le Raoul[29] » と自分の人生を導いてくれた存在として評価する。そのため、ラウルの生き様を尊敬するフェルディナンにも反戦主義的傾向が認められる。

またフェルディナン自身も、戦場を離れてもなお戦争の記憶に取り憑かれている。『ギニョルズ・バンド II』でヴィルジニーから妊娠したことを告げられると、周囲から受けることが予想される非難や今後の生活への不安からパニック状態に陥ったフェルディナンは錯乱し、現実は空想に侵食されてゆく。はじめ彼はその場にはいるはずのないマチュー警部や娼婦たちの姿を幻視し、あたかも現実で彼らが彼に迫害を加えているかのような妄想を繰り広げる。やがてフェルディナンは過去の出来事であるはずの戦場の記憶までも呼び起こす。苦しみのあまり四つん這いになったフェルディナンは、自分が戦場で馬になり従軍時の上官だったデ・ザントラーユ大佐がその上に騎乗するという妄想を抱く。戦争に反感を抱く主人公兼語り手にとって

蛮勇を振りかざす上官は忌まわしい存在であり、その馬になるという妄想は彼にとって屈辱である(30)。

> 続いて大佐の声がする… 我らの指揮官デ・ザントラーユだ！彼は鎧をつけて僕の上に乗る…ああ！誇り高き騎兵！100 キロの！雷のような大胆さ！そして中隊は彼に従う！その命令に！彼の雷のような声！その声は砲撃を突き抜ける…
> La voix tout de suite du colonel… du mien, des Entrayes chef de corps ! Il me monte en cuirasse ! ah ! c'est un fier cavalier ! il pèse cent kilos ! un cran du tonnerre ! Et les escadrons emboîtent ! à son commandement ! L'organe du tonnerre qu'il a ! sa voix traverse la canonnade…(31)

しかしながらフェルディナンが錯乱するきっかけとなったヴィルジニーの妊娠およびトゥイ＝トゥイ・クラブでの乱交パーティーに軍およびデ・ザントラーユ大佐は一切関与していない。したがってこの妄想の中で軍隊が登場したのは、フェルディナンが自身の従軍経験を過去のものにできず、未だに取り憑かれているからだと考えられる。身体的にも、負傷して除隊した(32)フェルディナンはロンドンへ行った後もその傷に悩まされる。だがフェルディナンが何ら関係のない場面においてまで戦争のイメージを幻視してしまうのは身体的な傷のためだけではなく、フェルディナンにとって戦争経験やそのイメージがそれほどまでに強迫的で、彼のうちに張り付いて離れないからだと考えられる。

一方『ギニョルズ・バンド』で描かれる戦争は、単なる恐怖やトラウマの対象にはとどまらない。先述の錯乱の中で、「『突撃ィィィ！突撃ィィィ！』彼を止めるものは何もない…旅団がトラデリデラルと突撃するところをちょっとでも見なきゃ…全速力で地面に転がり落ちてゆくのを…」« "Chaaargez ! chaaargez !" Rien l'interrompt… Faut voir un peu la brigade si ça fonce traléridéral… on dévale dessus ventre à terre…(33) »と、デ・ザントラーユ大佐と彼の連隊が潰走し深淵に落ちてゆくイメージを見る。しかし敵の攻撃を受けてもなおデ・ザントラーユは突撃を止めようとはしない。デ・ザントラーユの蛮勇を疎ましく思ったフェルディナンは、自分の上に騎乗する彼を振り落とそうと暴れる。

> その激しさといったら！我がデ・ザントラーユはなおもわめく！靴下の底まで踏ん張って！何十倍もの力を出したいんだ！僕の方はこの汚らわしい野郎を放り出したかった！もう我慢できない！この野蛮人が僕を締め付けるんだ… こいつ気づきやがった！鉄でできた 2 本のブーツで！僕の尻に一撃！僕は跳ね飛ばされた、驚くべき飛翔！爆発のかなたを飛んでいく！ああ！それでも僕は従わないぞ、クソッタレ！ふっ飛ばしてやる！奴はぐらつく…それでもたてがみにしがみつく…吸血鬼並みに強情だ…僕はまた蹴っ飛ばす、こい

つをふっ飛ばすんだ！

C'est vous dire toute l'intensité ! mon des Entrayes hurle toujours ! Il arc-boute chausse à fond ! Il veut qu'on décuple qu'on se surpasse ! Moi je vais le vider le sale outil ! C'est plus supportable ! Il m'étreigne le féroce... il se doute ! ses deux bottes de fer ! un coup de ma terrible croupe, je pars, envole, prodige dans l'essor ! Je plane au-dessus des explosions ! Ah ! je suis pas soumis, merde quand même ! Je lui fous un écart ! il vacille... il me raccroche aux crins ! C'est un coriace un vampire ! Je rue encore je vais l'expédier !(34)

フェルディナンが攻撃を加えてもなお、妄想の中のデ・ザントラーユは身を立て直してフェルディナンを御しようとする。しかしフェルディナンは最終的に「強烈な尻の一振り」で上官を突き飛ばした « Je l'ai démonté d'un coup de cul monstre ! C'était fatal ! (35) »。これが致命的な攻撃となってデ・ザントラーユは深淵へと落ちていく。また最後の一撃を上官に食らわせる時、フェルディナンは彼の名前デ・ザントラーユ « des Entrayes »と発音の似た単語である« entraille »（内臓）、« raille (railler) »（嘲弄する）、 « déraille (dérailler) »（道を外す、分別をなくす）を並べるという言葉遊びを思いつき、死にそうになるほど大笑いする « Ils me feront mourir de rire perdu(36) »。上官を嘲笑しつつ深淵に突き落とすというこの妄想からは、主人公が抱く戦争や軍隊への反感を読み取ることができる。しかしこの箇所で戦争は、『夜の果てへの旅』のように単なる恐怖の対象ではもはやない。むしろ敵の攻撃を受け死ぬことが分かっていてもなおも突撃する部隊や、それを率いるデ・ザントラーユの姿は滑稽に描かれる。そして妄想の中では、フェルディナンは兵士、あるいは上官が騎乗する馬という虐げられた存在である。しかし彼は無力な存在ではなく、戦争を続けようとする当時の上官を深淵に突き飛ばす力を持つ。

さらに『ギニョルズ・バンド I』にはフェルディナンがフランス領事館に赴き再度の従軍を志願する場面が存在する。彼は軍医に対し「僕は人殺しです！軍医さん！僕は 10 人殺しました！100 人殺しました！1000 人殺しました！次は皆殺しにしてやります！軍医どの、もう一度戦場へ送ってください！僕の居場所は前線です...戦場へ...」« Je suis l'assassin ! Monsieur le Major ! j'en ai tué dix !... J’en ai tué cent !... j'en ai tué mille !... Je les tuerai tous la prochaine fois !... Monsieur le Major renvoyez-moi !... ma place est au Front... za la guerre !...(37) »と自分を前線へ戻すよう懇願する。しかし軍医の方は「若者よ、君は除隊になったんだよ！...君の書類さ！君の証明書は規定通りだ！...全くもって完璧だ！除隊さ！言ってることが分かるよな？80%！君は審議会を通ってるんだ！ダンケルク！ベテューヌ！ラ・ラペ！覚えてるだろう？だから年金を待っていればいいんだ」« Vous êtes réformé mon garçon !... Vos papiers ! vos pièces sont en règle !... Absolument

impeccables !... Réformé !... Me comprenez-vous ?... 80 pour 100 !... Vous avez passé les Conseils ! Dunkerque ! Béthune ! La Rapée !... Vous souvenez-vous ?... Attendez donc votre pension !(38) » と、フェルディナンが負傷して除隊したことを理由にこの願いを却下する。フェルディナンはなおも自身を再度従軍させるよう懇願し、「従軍させないなら貴様を殺してやる！」« Alors je vais vous assassiner !(39) »とまで言い放つ。だが結局のところフェルディナンの志願は受け入れられることはなく、彼は領事館からつまみ出されてしまう。

『ギニョルズ・バンド』のこの場面では主人公と国家の関係が、先述した『ロンドン』の結末とは逆転している。『ロンドン』では戦争に行きたくない主人公と主人公を戦場へ向かわせようとする国家という図式が認められる。一方、『ギニョルズ・バンド I』では再従軍を強く志願する主人公に対し、領事館にいる軍医（およびその背後に存在するフランス国家）は彼の志願を却下する。

もっともフェルディナンが再従軍を志願したのは、純粋な愛国心のためあるいは戦争に魅力を感じたからではない。彼は友人が行った金貸しヴァン＝クラーベン殺害の冤罪をかけられたことで警察の手から逃れるため、従軍してロンドンを離れようと考えた。また自身が殺害したわけではないとはいえ、ヴァン＝クラーベンの死に関与したことや、領事館にたどり着く過程でミルパットを死に追いやってしまったことに対する罪悪感も認められる(40)。加えてこの挿話は一種の笑いどころとしても書かれている。例えば軍医と面会した当初、負傷兵のフェルディナンは英雄として丁重に扱われた。しかし彼が再従軍を強硬に要求しつづけた結果、しまいには領事館の全職員の老若男女がフェルディナンに襲いかかる事態になった。挙句の果てには領事までもが「とっとと失せろ、このチンピラ！」« Foutez-moi le camp d'ici, voyou !...(41) »と彼を罵倒しに現れる。このような攻撃は明らかに現実味を欠いており、領事館での出来事、特に軍医や領事を含めた全職員の罵倒は滑稽なまでに誇張されて描かれている。そのためこの挿話を持ち出し、フェルディナン（あるいは作者セリーヌ）が戦争を肯定しているとまでは言い難い。とはいえ、再度の従軍を志願する主人公の姿は、『夜の果てへの旅』あるいは『ロンドン』で再び前線へ送られることを恐れる主人公からはかけ離れている。

このように『ギニョルズ・バンド』における戦争は、圧倒的な力で全てを破壊し主人公を怯えさせる存在というよりも、むしろ皮肉や嘲笑の対象として半ば滑稽に描かれる。この戦争観の変化にはシェラ号での一連の経験が影響を与えているのではないだろうか。シェラ号で船医として勤務したこと、およびキングストン・コーネリアン号との事故によってセリーヌは戦争や軍に対する肯定的な思い出を得た。自身の軍事的な場における活躍の可能性を見出したセリーヌは、作品でも恐怖の対象という戦争観から脱却し、より冷静な視点で戦争を見つめるようになった。その結果、『ギニョルズ・バンド』では戦争を嘲笑するような描写が生まれたのではないだろうか。戦争に対する恐怖にとらわれたままならば、戦場や再従軍の話題を諧謔や皮

肉とともに描くことは難しいだろう。戦争観の変化とシェラ号経験の関係は、『Y 教授との対話』における滑稽なまでに誇張された軍事的功績としての衝突事故への言及につながると考えられる。

セリーヌのシェラ号経験は、第一次世界大戦の従軍や第二次世界大戦末期から始まった流転の日々、あるいは 1930 年代後半の反ユダヤ主義的政治パンフレットの執筆のようなよりインパクトの強い事件の影に隠れ、あまり注目されてこなかった。だが作家に強い印象を残したこの経験について考え、作品に与えた影響を探ることは大きな意義が認められる。特にセリーヌがシェラ号で（この船が軍に徴用されたという偶然のめぐり合わせとはいえ）第二次世界大戦の一部に関与し、戦争や軍隊に対し肯定的とも言える記憶を得たことに関しては、戦争作家としてのセリーヌを考える上でより詳細に検討されるべきではないだろうか。

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125 および名古屋大学卓越大学院 TMI プログラムにご支援いただいております。この場を借りて「東海国立大学機構融合フロンティア次世代研究事業」および「TMI プログラム」に御礼申し上げます。

注

(1) セリーヌの反戦主義、特に反ユダヤ主義との関連を論じた文献としては、竹田悠「セリーヌ的反ユダヤ主義：その特殊性をめぐって」『仏語仏文学』32 巻, 2006, p. 59-74.などが挙げられる。
(2) セリーヌが抱いた戦争のトラウマと作品への影響を論じた先行研究として、例えば Yoann Loisel, Émeric Saguin, *Le Traumatisme de la Grand Guerre et Louis-Ferdinand Céline*, L'Esprit du Temps, 2021.がある。
(3) セリーヌ自身も友人への手紙やインタビューの中で、自分が戦争に深い嫌悪感を抱いている反戦主義者であることを度々主張していた。cf. « l'Interview avec Louis-Albert Zbinden », in *Cahiers Céline 2*, Textes réunis et présentés par Jean-Pierre Dauphin et Henri Godard, Gallimard, 1976, p. 71, « La lettre à Simone Saintu, du 11 décembre 191[6], in *Cahiers Céline 4*, Textes réunis et présentés par Jean-Pierre Dauphin, Gallimard, 1978, p. 156.
(4) *Lettres,* p. 604.
(5) フレデリック・ヴィトゥー, 権寧訳『セリーヌ伝』水声社, 1997, p. 387-388.
(6) ヴィトゥー, *op.cit.* p. 388. ただしヴィトゥーは、パケ社は 2 月 21 日に新たな仕事で乗船するようセリーヌに提案したとも述べる。cf. *ibid.* p. 656. 加えてフィリップ・アルメラスは、パケ社は彼に仮の雇用保障を与えたが、シェラ号の修理が完了した 5 月中旬には何も決まっていなかったと指摘する。cf. Philippe Alméras, *Céline Entre Haines et Passion*, Pierre-Guillaume de Roux, 2011, p. 218.
(7) Henri Godard, *Céline,* Gallimard, coll. folio, 2018, p. 415
(8) *Id.*
(9) François Gibault, *Céline 1932-1944 Délires et persécutions*, Mercure de

France, 1985, p. 202.
(10) *CR4*, p. 314.
(11) *CR2,* p. 695.
(12) David Labreure, *Louis-Ferdinand Céline, une pensée médicale,* Publibook, 2009, p. 105.
(13) *CR4,* p. 517.
(14) Michel Lacroix, « "Le galérien du style" et le "grand jeu" de "l'interviouwe". Écriture et médiatisation littéraire chez Louis-Ferdinand Céline » *Études littéraires,* Québec, nº 40(2), 2009, p. 121-122.
(15) *Lettres*, p. 603-604.
(16) *Id.*
(17) 木下, *op. cit.* p. 71-72.
(18) *Guignol's II*, p. 630.
(19) *Id.*
(20) *Lettres,* p. 604.
(21) Godard, *op.cit*. p. 300.
(22) *Voyage*, p. 77.
(23) *Id.*
(24) *Londres*. p. 520-521.
(25) 「お前らの 1912 年の顔」とは彼らが戦争を経験していないことを指すと考えられる。また彼らは各国の警察から追われる身であり、目立ってしまうことは不利益をもたらす。
(26) *Londres*. p. 527.
(27) *Guignol's I*. p. 204-205.
(28) 杉浦順子「セリーヌ作品における抵抗の諸相：アナーキストか, ユーモリストか」『関西フランス語フランス文学』15 巻, 2009, p. 37-48.
(29) *Guignol's I*. p. 205.
(30) この妄想について、木下は「馬」もまたフェルディナン（およびセリーヌ）にとってトラウマの形成要素であり続けた可能性を示す。cf. 木下, *op.cit.* p. 69.
(31) *Guignol's II*, p. 547.
(32) フェルディナンはソステーヌと今後について話し合う際、「考えにはボケているところがあるけど…でも僕には責任があるんだ！疑いの余地はないよ！退役辞令にもこの通りはっきり書いてある。「穿頭手術済み。精神不安定だが責任能力有り」って」« Je suis un peu flou dans mes idées... mais je suis responsable! Pas de discussions ! C'est écrit clair dans ma réforme. "Trépané, psychisme heurté, mais responsable". » (*Guignol's II*, p. 601.) と、自身の退役辞令を示す。
(33) *Guignol's II*, p. 547.
(34) *Guignol's II*, p. 549.
(35) *Guignol's II*, p. 550.
(36) *Id.*
(37) *Guignol's I*, p. 197.
(38) *Guignol's I*, p. 199.
(39) *Guignol's I*, p. 200.
(40) ヨアン・ロワセルとエメリック・サガンはフェルディナンが『ギニョルズ・バンド』の中で罪悪感を抱え罰を求め続けていることを指摘し、このエピソードには彼のそのような態度が表れていると述べる。cf. Loisel&Saguin, *op.cit*. p. 181-182.
(41) *Guignol's I*, p. 202.

また本稿では、以下の通り略号を使用した。なお特記しない限り、本稿で用いたフランス語テクストの日本語訳は既訳を参考にしつつ本稿著者が行った。

Guignol's I : Louis-Ferdinand Céline, *Guignol's band I* in Louis-Ferdinand Céline, *Guignol's band I et II,* Gallimard, coll. Folio, 2016, p. 7-247.

Guignol's II : Louis-Ferdinand Céline, *Guignol's band II* in Louis-Ferdinand Céline, *Guignol's band I et II,* Gallimard, coll. Folio, 2016, p. 249-721.

Voyage : Louis-Ferdinand Céline, *Voyage au bout de la nuit,* Gallimard, coll. Folio, 2019.

Londres : Louis-Ferdinand Céline, *Londres,* Gallimard, coll. NRF, 2022.

CR2 : Louis-Ferdinand Céline, *Céline Romans,* t. 2, édition présentée, établie et annotée par Henri Godard, Gallimard, coll. Bibliothèque de la pléiade, 1974.

CR4 : Louis-Ferdinand Céline, *Céline Romans,* t. 4, édition présentée, établie et annotée par Henri Godard, Gallimard, coll. Bibliothèque de la pléiade, 1993.

Lettres : Louis-Ferdinand Céline, *Lettres,* édition établie par Henri Godard et Jean-Paul Louis, Gallimard, coll. Bibliothèque de la pléiade, 2009.

参考既訳

L-F. セリーヌ『北』上下巻, 高坂和彦訳, 国書刊行会, coll. セリーヌの作品, 1981.

L-F. セリーヌ『ギニョルズ・バンド I』高坂和彦訳, 国書刊行会, coll. セリーヌの作品, 1995.

L-F. セリーヌ『ギニョルズ・バンド Ⅱ』高坂和彦訳, 国書刊行会, coll. セリーヌの作品, 1996.

L-F. セリーヌ『ノルマンス：またの日の夢物語 II』梅木達郎訳, 国書刊行会, coll. セリーヌの作品, 2002.

L-F. セリーヌ『苦境 他』池部雅英訳, 国書刊行会, coll. セリーヌの作品, 2003.

セリーヌ『夜の果てへの旅』生田耕作訳, 中公文庫, 2003.